庄司和晃　私の研究歴・談話録（１）

研究題目はでっかく、やることは細かく

――〔第１期〕宗教学研究時代（1947）～〔第２期〕宗教教育研究時代（1948）――

２０１４．１．２５　全面研例会（於　成城学園）

・・・ともあれ、自分のやりたいというものをもって、一生悔いなくやってゆければいいなと思っています。自分でやりたいものを外しちゃうと流されますよ、ということが肝要です。さて、これから、自分はどう生きてきたかというものを入れて、自分の研究遍歴を少しずつ話していきたいと思います。

（１）戦争を生きのびる　やりたいことをやらねば

自分のこれまでの人生をふりかえってみますと、２０１１年の３．１１の津波・原発事故が多くの人にとって大変な体験だったと同じように、ぼくの場合は、戦争に負けたということが大変なことでした。このあいだ、「仮説社四十周年記念の会」に行ってきました。その時に購入した講演記録をみると、板倉先生の幼年学校時代の凛々しい写真姿が目に入りました。ぼくは初めて見たんですけれど、板倉先生は戦争中、幼年学校に行っておったんです。陸軍幼年学校は当時、仙台・東京・名古屋・広島・熊本にありました。いや、これは頭の良い、将来、将官クラスまでいくという連中を教育する学校です。

板倉さんはここで敗戦までの四ヶ月間、教育を受けたそうです。ぼくは海軍の予科練で一年間、教育されました。板倉さんは幼年学校の教育も含めて、ウソを見破られなかったという反省が、戦後における仮説実験授業（以下、「仮説」と略す）の創造に向かうわけですが、そのテーマを「主体性の教育」と理論づけたのも、戦争体験だったのですな。

ぼくの一年間の体験が敗戦で終ったとき、ウワーッ、こんなでっかい体系で固めた七〇年の伝統をもつ海軍、そして一兵卒から元帥までの十四階級の制度が、一挙にバタバタとひっくりかえっていくさまに、ほんとに諸行無常を感じました。そして、自分のことを考えると、郷里（クニ）に帰って百姓でもして、さらに山奥に入って生きていくのかなあ、などと思ったものです。

しかし、・・・生き延びましたね。

このあいだ、曾孫ができたときにですね、こう思ったんですよ。ぼくは、予科練は志願で行きました。一年間です。さらに途中から特攻隊へも志願しました。だいたい一ヶ月くらいの特攻訓練で、いよいよ本土決戦というときになって、「止めよ」と言われたものですから・・・大変だったのです。いやよく生きてきたものです。おれが生きているからこそ子がおり、孫がおり、そして曾孫がいるんだなあと、つくづく顔を見つめたですね。やはり命があるということがスゴイです。

また、さっきの仮説社四十周年記念の会で、ぼくは幼年学校時代の、われわれを睥睨（へいげい）するような板倉さんの写真を見ながら、そんなふうにならないで、四ヶ月でよく帰ってきたものだ、もし帰って来られなかったら、仮説実験授業も生まれていなかったんですよ、という話をしたところでした。とにかく、生きているということは大変なことだと、改めて思いました。ですから、若い人は一生やりたいことをやって生きましょう、こう思いながら今も生きているわけです。

（２）庄司和晃とは何か　研究歴を見る

さて、「庄司和晃とは何か」という問いかけに応えていくために、恥ずかしいけれども、若い頃の資料を紹介していこうと思っているわけです。まず一つ目の資料「私の研究歴・その控」を見て下さい。１９２９年に生まれて、「そのまま信じての戦争協力時代・予科練生活、そしてまさかと思った帝国軍隊崩潰への仰天時代」と、とにかく壊れるときは一挙に壊れるものですね。そういうことはソビエトに対しても肌で感じましたね。

昭和４０年にソビエトの婦人委員会に日本の芸術家と教育家が合わせて１０人ぐらい招かれたんです。当時国交がありませんでしたから、社会党の事務局に招待状がきて、三浦つとむさんに「庄司さん、行ってみたらどうだ」と言われて行ってきました。ソビエトでは希望したところは全部見せてくれました。

当時、ぼくの『仮説実験授業』(国土社　一九六五）という四百五十頁ほどの本が出たのですが、このときの裏話があります。さきの会で、竹内三郎（当時、国土社勤務）さんから聞いたのですが、国土社ではこの本を出すかどうかというときに、板倉さんが「出しなさい、丁寧に装丁してがっちりしたものを出しなさい、そして値段は安くしないで高くしなさい」と出版社にアドバイスしたことを知りました。当時二千五百円だったと思います。どういうことかといいますと、当時「水道方式」の本などは、なるべく安く安くといくものだから、短期間で売れ切れてしまう。だけど装丁や値段をこうして出版すれば、長く売れるはずだ。こう、板倉さんは言ったそうです。結果は、おおよそそのようになりました。それで十年前には、仮説実験授業四十周年記念復刻版が出たんですよ。この時は仮説社を起こした竹内三郎さんが出してくれたんですな。竹内さんの編集歴五十年、仮説社四十年のお祝いの会ときに御礼に出かけていきました。

（１９２９：山形県に生まれる）……（そのまま信じての戦争協力時代＆予科練生活）――（まさかと思った帝国軍隊崩潰への仰天時代）――（百姓・禅坊主時代）――（１９４５：山形師範学校にはいる）――（高山法眼の道元学、佐藤信保の空海学・仏教学・哲学　塚本天英の宗教学、工藤泰正の教育学の摂取）＝　宗教学研究時代　＝（後藤留吉の理科論の摂取）――（１９４８：長井市豊田小学校につとめる）＝宗教教育研究時代　＝（渡辺和宣の教育論、今泉英信の教育論の摂取）――（１９４９：成城学園初等学校につとめる・現在に至る）――（馬場和光の全体医学の摂取）＝医学的宗教教育研究時代　＝（柳沢政太郎の教育学、柴田　勝の教育論の摂取）＝印象教育研究時代　＝（１９５１：東洋大学仏教学科を中途退学して日本大学宗教学科にはいる）――（柴田芳見の文学論、今井真澄の新気学の摂取）――（『高山』『朝鮮』同人雑誌時代）　（柳田国男の民俗学、小林秀雄・亀井勝一郎の文芸論、鈴木大拙の禅学、森信治の教育哲学・教育心理学の摂取）――（柳田社会科確立への参加）＝柳田民俗学研究時代　＝文芸論研究時代　＝（山田一枝の理科論、古川隆男の昆虫学・生物学・教育論の摂取）――（ファーブル会参加）＝児童言語採集研究時代　＝はいまわり的経験主義理科時代　＝自学理科研究時代　＝（Ｓ．リリーの技術史、Ｎ．ティンベルヘンの動物行動学、矢島稔一の昆虫飼育学、今西錦司の生態学、京都サル学、可児藤吉の昆虫生態学、江原昭善の人類学、ダーウィンの進化論、深水正策の文化論、笹田忠義の歴史学・人間論、岡本太郎の伝統論、吉本隆明の文学論、武谷三男の弁証法、梅棹忠夫の文明論、伊藤　整・堀田善衛・中村光夫の文学論・文学的認識論、井尻正二の地球史

―３４５―

そういう仮説社四十周年の会でのこと。進行役が「この人（庄司のこと)、初めてだという人？」と訊ねると、百人くらい集まっていましたが、だいぶ手が挙がるんですよ。・・・私もだんだんミイラになっていきますよ（爆笑)。山形には月山・羽黒山・湯殿山の出羽三山がありますが、おれもミイラ時代になったなあ、と思います。

（３）『我が育心の遍歴』　印象を人生の光に

ぼくの戦後は「百姓・禅坊主時代」から始まります。そのうち一九四五年の十一月に山形

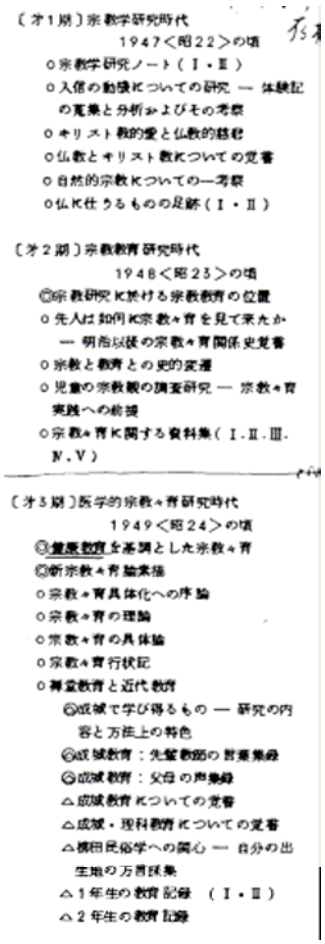
師範学校に入りますが、これは編入試験を受けたのです。じつに、ぼくらの学歴はすごくいい加減です。板倉さんも旧制中学ではきちっと勉強したのは２年ぐらいだったそうで、あとは勤労奉仕・軍事訓練に費やされていきました。旧制中学は五年間やるべきところを、ぼくらの時代は四年生で卒業というふうに変わりました。ぼくの場合は四年生の一学期を終了して予科練に行ったものだから、中学のほうで予科練に行っている間に卒業したということにしてくれたんですよ。初めて教職についたのは一九四八年山形県長井市の豊田小学校でした。

まず、山形師範学校時代。

二つ目の資料を見て下さい。「研究題目はでっかく、やることは細かく」と考えていましたので、題目は「昭和二十二　二十三年度　我が育心の遍歴――（宗教教育研究輯）」です。〔第１期〕宗教学研究時代（１９４７年頃）と〔第２期〕宗教教育研究時代（１９４８年頃）に相当します。そのあと、〔第３期〕医学的宗教教育研究時代（１９４９年頃）へと続きます。

なぜか知らないのですが、ぼくは書くことが好きだったのですなあ。だから頼まれなくても、とにかくよく書きました。師範学校へは汽車通学でしたから、汽車のなかで、それから一里ばかり歩きましたが、その途中で何か思いつくとメモしました。そういう文章が溜まり溜まって、いま回覧していただいている一番厚くでっかい本になりました。書きためたものを製本したのです。

これが第一巻で、名前を『昭和二十二、二十三年度　我が育心の遍歴――（宗教教育研究輯）』（以下、著書本体を『遍歴』、談話資料として抄録したものを「遍歴」と略記）とつけました。そこに、私の名前が「庄司宗晃(むねあき)」と記してあります。これは親父がつけてくれた戸籍上の名前です。それからぼくが上京するとき、可愛がってくれた先生の奥さんがつけてくれた名前が「宗顕(むねあき)」です。その方が、発展性があるよ、ということでいただいた名前です。もう一つあるんです。「発展」している間ですね、ぼくもあちこち病気になりました。母親は三十三歳のとき結核（ムネ）で亡くなっています。ぼくの名前も「宗(ムネ)」がついているので、なんかアチラから誘われる気がして「和晃(かずあき)」と改名したのです。それで、世の中に出すのはこっちのほうになりました。


〔才１期〕宗教学研究時代
1947〈昭22〉の頃
○宗教学研究ノート（Ⅰ・Ⅱ）
○人間の動機についての研究 ― 体験記の蒐集と分析およびその考察
○キリスト教的愛と仏教的慈悲
○仏教とキリスト教についての覚書
○自然的宗教についての一考察
○仏に仕うるものの足跡（Ⅰ・Ⅱ）

〔才２期〕宗教教育研究時代
1948〈昭23〉の頃
◎宗教研究における宗教教育の位置
○先人は如何に宗教々育を見て来たか ― 明治以後の宗教々育関係史覚書
○宗教と教育との史的変遷
○児童の宗教観の調査研究 ― 宗教々育実践への前提
○宗教々育に関する資料集（Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ）

〔才３期〕医学的宗教々育研究時代
1949〈昭24〉の頃
◎聖愛教育を基調とした宗教々育
◎新宗教々育論素描
○宗教々育具体化への序論
○宗教々育の理論
○宗教々育の具体論
○宗教々育行状記
○尊愛教育と近代教育
◎成城で学び得るもの ― 研究の内容と方法上の特色
◎成城教育：先輩教師の言葉集録
◎成城教育：父母の声集録
△成城教育についての覚書
△成城・理科教育についての覚書
△横田民俗学への関心 ― 自分の出生地の方言採集
△１年生の教育記録（Ⅰ・Ⅱ）
△２年生の教育記録

（４）宗教学と教育学　学者たちのいた村々

資料２「遍歴」の二枚目です。「はしがき」には、この「遍歴」が師範学校入学に始まることが記してあります。ふりかえってみますと、やはり先生ですねえ。学問を摂取するためには人との出会い、先生との出会いが大きかったです。

まず「高山法眼の道元学」を学びました。その頃は戦後直後でしょ、疎開やら、親が亡くなって山形に帰ってくるなどして、世代交代の時期でした。高山さんは東京帝大で、和辻哲郎の『倫理学中巻』の講義を聴いたというひとで、それを誇りにしている坊さんでしたね。

それから「佐藤信保の空海学・仏教学・哲学」です。佐藤さんは真言宗の坊さんで、やはり東京帝大の印度哲学を出て、大阪大学で教えていたひとです。このひとも親父さんが亡くなって山形に帰っていたんですね。そういう人たちが、村々にゴロゴロっていうくらいにいたんですよ。だからぼくらは「学生会」をつくってそういう人たちをたのみ、いろんな話を聴いていったんです。それが勉強の始まりでしたね。

とくに佐藤信保さんからは、人間精神の発展段階を十に分けた空海の『十住心論（じゅうじゅうしんろん）』における議論を聞き、のちに「認識の三段階連関理論」に空海学を取り

入れることができたんです。この書物は日本で最初の体系立った理論書といっていいかもしれませんね。植物、犬猫など動物の本能的段階から人間的段階、さらに天台的段階へ行って、最後はいちばん奥深い密教の密の世界に入るという体系を作ったんです。「十住心論（じゅうじゅうしんろん）」とは、「住心」は心の住処のこと、その十段階説のことです。これは大変参考になりましたね。

空海の書物はほかにもいろいろあって、そのなかで面白かったのは『請来目録（しょうらいもくろく）』といって、最澄さんもそうですが、中国に留学した僧侶が出立するとき国家からも一族からも費用をもらいますが、それで書物をどんどん買って来られるわけです。空海も書物や仏像などをごっそり買ってきたわけね。そして購入品の目録を朝廷に提出するわけです。それが今も解説付きの本になっています。その解説を読んだとき空海がこういうことを書いています。「密蔵深玄にして翰墨にのせ難し、図画を借りて開示す」と。密の世界は非常に奥深い、ちょっとやそっとではわからない。書物などではわからない。それで絵で表すことになった、という意味です。それで曼陀羅（マンダラ）を持ち帰るわけです。「開示す」という言葉には、認識論における「おりる」というあり方がよく表われています。

さらに、「塚本天英の宗教学」を学びました。この人は隣村出身で、東京帝大で宗教学を学んだ人です。とても禅坊主らしいんだけれど、集会などでいきなり豪快にオナラをするんですな。平気で何発もやるんです。面白い方でした。

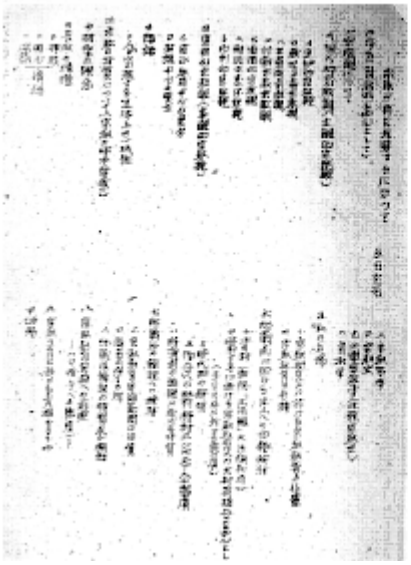
工藤泰正先生の教育史・教育学・教育心理も忘れがたいです。戦後（直後）ですからね、東北大学からやってきた先生で、教室の中にベッドをおいて生活していましたね。この先生のすごかったのは、日本教育史を一時間で講義してくれるんですよ。重要なところはここだというふうにしてポイントを押さえて授業するんです。そして西洋教育史をやはり一時間で教えるんです。「一時間」といってもこれは単位時間のこと。実際は９０分くらいあったでしょう。非常に面白い先生で、ぼくは好きでした。

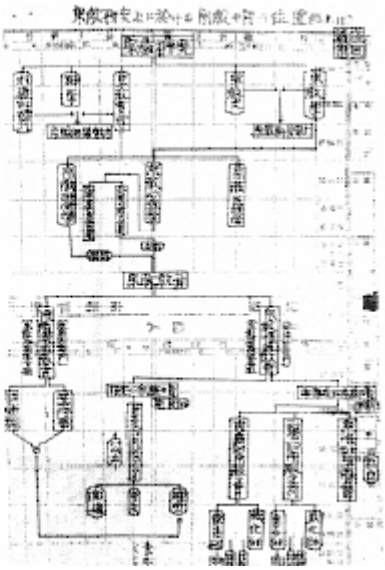
（５）宗教体験談の分析　母の力

師範時代に作った第一巻『遍歴』は大変分厚いものですが、こういうのが５，６冊あります。その頃、山形師範学校の売店では申し込むと上手に製本してくれました。「まえがき」を書き目次も作ったのはこの『遍歴』だけです。残りはただ綴じてあるだけ。

目次に（下図右）、「第一篇　宗教教育研究」の④に「『体験談考察』の批評集」という項目がありますが、これが一つ大きな仕事になります。この中に「大法輪に於ける『佛道の生活体験談』に対する一考察」のカードの一部（下図左）をコピーしておきました。戦争中までの『大法輪』は今で言えば『文藝春秋』を凌ぐほどの雑誌でした。これに載ったおよそ二百人の「佛道の生活体験談」を、掲載号、題目、県市町村別、氏名、職業、性別・年齢、婚別、　宗派、機縁となりし動機、九つの観点ごとに付記を書きつつ分類整理し考察したものです。

これを空海学の佐藤信保先生に見せたらほとんど見てくれなかったです。宗派だけ見てね、「ほとんど禅宗と浄土宗ですな」と。真言宗（空海）の人がいな





かったからでしょう。しかし塚本天英先生に見せたら、一字一句読んでくれました。そこで初めて宗教学の見方を知りました。体験談を整理して印象に残っているのは、その宗教との機縁には「母の力」（感化）が非常に大きいことです。

「遍歴」の最後のプリントは、成城学園に移る前にまとめた宗教学の受け止めを、一つは、「宗教研究上に於ける宗教教育の位置」（上図右）と題して体系化したものです。二つは「宗教教育を考察するに当って」と題して、置賜の教員時代にまとめた研究の目次（上図左）だけをコピーしたものです。

（６）教育実習　理科教育研究のきっかけ

ぼくたちの時代、教育実習は丁寧にやってくれたですね。まずは附属小学校で一か月か二か月やります。次いで山形市内の第六小学校で一か月くらいやりました。最後は自分の卒業した小学校で一か月くらいやったのです。その時に出会ったのが附属小学校の後藤留吉という理科の先生です。ここで生物関係の刺戟を受けたことが理科教育を研究するキッカケになりました。それから市内の第六小学校でお世話になった高木栄一先生はスゴイ先生でした。その頃学校演劇が盛んになるんですが、舞台の電気関係の配線などを自分でやってしまう方でした。それを見てすばらしいと思ったね。実習期間だけでは実力をつけられませんでしたが、好きになりました。

（７）豊田小学校に赴任　教育技術という必要条件

次は、「置賜(おいたま)時代」です。師範学校を卒業し赴任するんですが、ぼくはどこでも良かったのです。そう言ったら、ほんとうに他郡にとばされました。他に五、六人いました。ぼくの恋する女性も飛ばされました（笑）。ヨカッタねえ。でもその女性はすでに相手が決まっていて実が結ばなかった。そういう良いこともありました。

赴任したのは西置賜(にしおいたま)の豊田小学校（長井市立豊田小学校）でした。はじめは中学校の先生に決まっていたんですな。でも、「小学校でやりたい」といったら、付属小の後藤留吉先生と、教育事務所の渡辺円蔵先生が動いてくれて、豊田小学校に赴任できたのです。そこで校長の梅津茂先生と今泉英信先生に出会いました。今泉先生は教育技術の神様みたいな方でした。とにかく教員に成り立てですから授業でアタラフタラしているときに、そろばん教育とか絵画の教育などで丁寧に教えていただきました。これは記録に残してあります。

（８）宗教教育調査に着手　記録というものの価値

また、三つ目の資料「昭和二十三年度　宗教教育実践への前提――（調査事項を中心として）――」は置賜時代（豊田小学校）にまとめた調査研究です。宗教教育調査資料として、

① 神様とか仏様とかは本当にいると思うか、

② それは何故か（理由）、

③　世の中で不思議に思うことあったらみんな書きなさい、

と三つの質問事項によって三～六年生に訊いてみたことをまとめたものです。当時いろいろ文章を書いたりしたけれども、統計や子どもの声というものはいまだに残っています。調査資料というものの大事さがわかります。

質問事項①の、神様とか仏様とかは本当にいると思うかについて五年生の結果を見てゆくと、男女合わせて四十八人いますが、ほとんど（四十二人）が「本当にいると思う」と回答しています。②のその理由ですが、男子の回答を読んでみます。

・　仏様におがみに行ったりするからです。
・　法事なのでお寺に行っておまいりなどするから、それからお盆などがあるから。
・　仏様を呼んだり送ったりするから、その中に仏様がいると思います。
・　仏様を呼んだり送ったりするから、その中に仏様がいると思います。
・　仏様をお迎えに行ったりするから。
・　お正月の時などお盆の時など一番始めに呼ばったり送ったりするからです。
・　ちょうちんをたがって(持って)神様を迎えるからです。
・　法事などするから。
・　おとば様におまいりするから。

ハテ、「おとば様」とはなんでしたかな？　忘れてしまいました。――こういう回答を読んでみるとね、子どもたちが本当に素直というか、一つひとつが「ソウカー」といって頭を撫でてあげたい位の言葉ですな。同じ調査を篠原君が今の小学校でやってくれましたね。子どもの声が次のページにも出ていますね。

回答が「本当にいないと思う」子どもたちの理由も見ていきましょう。

・　仏様が目に見えないから。
・　姿が目に見えないから。
・　昔はいたけれども今は死んだからです。
・　死んだ人は生きたりしないから神様とか仏様はいない。
・　わからない。

女子は次のページに記載してあります。六年生の調査結果もありますからあとで読んでみて下さい。

（９）成城学園初等学校　宗教教育への助言

それから「成城時代」になります。豊田小学校を二年で退職して一九四九（昭和二十四）年、東京の成城学園初等学校に勤めることになります。最初は五年生の担任です。そこで出会ったのが、馬場和光先生です。先生は戦時中の「科学する心」の説とか、『行としての科学』という著作で有名な文部大臣橋田邦彦（医学者でもあった）に帝大で学んだ方で、漢方と西洋医学をやる方でした。この先生には、ぼくがやって来た宗教教育研究は「観念的」だと指摘され、宗教教育は健康教育を基調にしないとだめだという助言を受けました。身体、それは柔らかくないといけない。柔らかいかどうかは腹を触ってみればわかる。また毎日脈をとる習慣をつけたほうが宜しい。さらに検便をとることなど、実践的な助言でした。ぼくはそのほとんどを実行しました。それが〔第３期〕医学的宗教教育研究時代です。

東京で成城学園初等学校に勤めてからは、大学の夜学にいきました。最初は東洋大学の仏教学部に行ったんです。ぼくは仏教学というのをきっちり勉強したいと思ったんです。その頃は、大学はだいたい自由に入れたんです。さっそく授業ですが、天台智顗（てんだい ちぎ）の『法華玄義（ほっけげんぎ)』という書物を持ってこい、ということで始まったんですよ。これは天台宗の基本図書ですが、岩波文庫を購入して持ってきました。

教室には三、四〇人いました。ぼくを含めて、ほとんど坊さんの家の出身で、そのあたりは天台・真言・浄土宗の人たちでしたな。それで、先生がやってくると、その学生たちが先生の肩もみを始めるんです。そうすると、「〇〇君、あそこにいい娘さんがいるから、結婚してお寺を継いだ方がいいですよ」なんていうことを喋ってばかりで、なかなか『法華玄義』

が始まらないのですな。ぼくは三〇分我慢してたんですが、次の講義のときに、先生と学生がナアナアになっていたことに気づいて、ぼくはヤーメタと決めたんです。事務局に行ったら、ヤメナイデクレと言われましたが――。そんなんで、ぼくは日本大学の宗教学科に入り直し、仏教を含めて宗教を広く学ぶことにしました。

（９）卒業論文　大学で広く宗教学

四つ目の資料を見て下さい。「昭和二十九年度（一九五四）日本人における外来思想の受容的基盤の研究――その覚書」なんて、おそろしいほどの題目をつけてやってたんですな。これをキッカケにして柳田さんを見つけるんです。それで、戦後社会科が始まると地域の勉強をするんです。村を歩いてみると、庚申塔などが建っています。庚申塔とはいったい何であるのか、あるいはなんでこんなところに祠があるんだろうか、子どもたちになんとか説明したいものだ、と思うようになっていきました。でも、ぜんぜん分からない。のちに東京の成城学園に移ってから柳田国男さんを知りその民俗学を繙いてみると、だいたいの疑問が解明されていることが分かってきたんです。それで、さきの「日本人における外来思想の受容的基盤の研究」という題目をくだいて「日本民族の霊魂観念について――（柳田国男著「先祖の話」を読む）」を綴ってみたんです。これをあとで卒業論文に仕立てたのです。

ぼくの実家は七十軒くらいの檀家をもつ曹洞宗の小さいお寺です。そこで行われている行事をつぶさに点検してみると、仏教ではほとんど説明できないですね。ここにお墓があるのになんで別に位牌を置くのだろう、お盆やお正月になるとお墓参りをして帰って行きます。両者はどういう関係になっているんだろう、こういうことがはっきりしない。それから葬式では棺を背負って左回りでまわって山に行き火葬にするなど、村の人々はどのような霊魂観念をもっているのだろうという疑問をもって一年間取り組んでみました。

たとえば、山で遺体を焼きますね、それはみんな怖いんですよ。薪を燃やしているとガンバコ（棺桶）がグラッと傾いてきて、故人の足なんかがビヤーと見えてきたりするんです。それを、酒を呑みながら二人で火をかき分けるなどして最後まで燃やしていくんです。翌日骨拾いに行ってみると、肉がくっついたままの大腿骨などが燃え残っていることがあるんです。遺骨を拾っていくときにも、人に受け渡してはいけない作法があって、いったいこれはどういうことなのだろうかなど、疑問がいちいちあるわけです。これらの疑問は仏教の霊魂観念やあの世観では説明しきれない、そういうときに出会ったのが柳田国男さんでした。

ですから、柳田さんの著作でいちばん読んだのは『先祖の話』ですね。いまでも体系的・哲学的、個性的な書物です。おかげでさきの疑問はだいぶ解決しました。三つ目の資料の中にある「日本民族の霊魂観念について――（柳田国男著「先祖の話」を読む）」にも、

> おじいさんやおばあさんが「死んだらお寺に行くのさ」と云うのは、仏教の極楽に行くことを意味していないと思うが、そこに何らかの連関があるのだろうか。「あの世この世」という言葉は仏教が伝来してから流布したのか。結婚すると先祖はどうなるのか、ヨメに行ったものは男性側の先祖に入るようだし、ムコに行ったものは女性側の先祖に入るようだが、ここに何の観念が横たわっているのか。仏壇に食物や飲物を供えるのは仏教の思想で解釈し得るのか。

と記したぼくの諸疑問は、かなりのところまで解決したわけです。

次いで同じ資料にある「民間仏教史研究への志向――（堀一郎著『我が国民間信仰史の研究』を読む）」を書きました。その時は、直接、堀一郎さんに聞いて学んだこともありました。このように、最初からバカでかい観点を持って学んできたのです。

卒業論文の審査は二人の先生でした。仏教学の主任の先生からは、「柳田から離れろ」（笑）、そう言われました。「あれは国賊だ」とまで言われて、ぼくはヘェーとびっくりしちゃったんですよ。日本の仏教学から見た柳田観というものが大変印象的でした。このとき、そう言うのはナンデカ？と主体的に訊ねる意志が弱かったものだから、黙って聞いていて怒られた

だけでした。しかし、もう一人の先生からは、「事実から出発していくのはいいぞ」と誉められ、ようやっと卒業論文が認められたという格好ですな。バカでかい観点でスタートし、実際は小さい事実をいくつも調べていったわけです。今回はここまでにしておきましょう。（拍手）

質疑応答

- （小田）研究の「題目はでっかく、やることは細かく」という発想は、どこから得られたものなのでしょうか。わたしは「大風呂敷を広げなさい」という庄司先生の言葉を覚えていますが。
- （庄司）特に誰からという影響ははっきりしないんですが、「なにか学問を作りたい」という願い、体系だったものを一つ出したい、こういう気持ちがあったから、そのためには、バカでかい観点を出さなければいけないと考えていました。でも当時は、大学の卒論などは、なるべく小さなテーマでやれという風潮が強かったと思います。だから「日本人の霊魂観念について」なんて言ったもんだから笑われちゃったですね。「日本人の」というのがどのあたりまで届いているのか。柳田國男は固有信仰を出していますが、これがどれほど昔に辿れるか、縄文時代なんて古くまで辿れるかどうか。考えてみればわかりますね。・・・だから、大きくやっていこうとしないと、研究はまとまりません。

  たとえば、仮説実験授業における予想選択肢をいかにつくるか、なんて言うところにこだわっていると、仮説実験授業という全体を見失ってしまいます。だから、これを大掴みにしてやろうと考えれば、狙いは何か、理想は何だという問題を考えないといけない。これを踏まえて教育内容も作らなくちゃいけないし、教育技術も開発しないといけません。今回、若い頃の研究をふりかえってみて、「題目は大きく、やることは細かく」というのは若い頃からの心掛け（方法）だったことを確認しました。以前「私の人生とはなにか」（2007.9.15　全面研ＨＰにて 2012.10.5 公開）を書いたとき、私の信条を五つばかり提示しました。そのうち、「①ばかでかい観点で行け」と書きましたが、若い頃の体験があったからですね。
- （小田）若い頃から「自分の学問を作る」という夢をもつというのがスゴイですね。感嘆します。
- （尾﨑）学問における先生の体系志向というのは、仏教研究が土台になっているのでしょうか。
- （庄司）土台になっていますね。空海の『十住心論』などは、中国とは別に自分で作り出した体系なんですね。私なんか、そうは言っても、やれないでバンザイして死んでいくかもしれないけれども、ああいうのやりたい、そう思ったのです。
- （尾﨑）そのような学問的な志向は、敗戦直後の若い人たちの一般的な雰囲気だったのでしょうか。
- （庄司）板倉さんがそうだと思いますが、戦時中の天に昇るような志向が敗戦で地に降りたのだと言っていいのかもしれません。例えばね、教育現場の当事者である先生たちが種々の問題でゴタゴタして来るのは、自分たちで教育内容を作れないからですね。なに、指導要領を無視しても作れば良いわけですな。それで、指導要領の通りヤッテないじゃないかと言われれば、「ヤッテますよ、ホレこの通り」と言い返せばいいんです。こういうふうにして自説を押し出していけばいいです。相手を抱き込んでいったらどうか、こういうふうに板倉さんは言っていました。これも題目は大きくという研究実践の一つだと思いますね。だから、教育史を繙けばわかるように、綴り方教育や算数の水道方式も「題目はでっかく、やることは細かく」やってきたのではないでしょうか。
- （尾﨑）先生の宗教教育への関心は予科練時代からのものですか。
- （庄司）いや戦争から帰ってからです。帰って百姓をしているときです。わたしの親

父は実家が百姓で、男の子が五人いてね、二人がお寺に預けられたんです。弟のほうが親父でそのお寺を継ぎ、兄の子孫はやはり別のお寺を継いでいます。その親父が、私の兄には跡継ぎになるために駒沢大学にやり、予科練から帰った私には檀家まわりを勧め、そのときに般若心経を唱える際の鉦の叩き方を教えてくれましたね。もう一つ教えてくれたことは托鉢ですね。修行僧の格好をしてお米とか何かをもらって歩く修行です。その際もらったあとに唱える文句を教わりました。「財宝二施、功徳無量、檀波羅蜜、具足円満、乃至法界、平等利益」といったものでした。ぼくは托鉢（たくはつ）というのは、村の人がただ一方的にくれるものだと思っていました。だから、三〇分でも一時間でも、いただけるまで立っていた事もあって、親父に怒られたこともありました。これぐらいで、あとは何かを教えてもらった覚えがないんです。だからでしょうね。かえって宗教への関心・意識が出てきました。自分から研究する気になったのです。

- （植垣）山形置賜の豊田小学校時代の資料４「昭和二十三年度　宗教教育実践への前提――（調査事項を中心として）――」という研究は、自由にやれたのでしょうか。今日話題になっている「学校のカタサ」という問題から言えば、当時の先生たちは解放されていたのでしょうか。
- （庄司）そうね、解放されたという意識はなくても、解放的でした。現場はかなり自由な雰囲気でしたね。みんな良くやっていたもんだね。組合だって校長から入っていたからね。「なに余計なことをやっているのか」という雰囲気はなかったです。無着成恭さんなんか、無茶苦茶やっているなんて言われても（笑）、生活綴り方とか国分一太郎さんをどの程度意識していたかわからないけれど、とにかく子どもたちと一緒にあの『山びこ学校』を実践したんだね。前に「戦後を歩きはじめる――(1)山びこ学校も遠くなりにけり――」(2013.8.24 全面研ＨＰに 2013.09.02 公開）に書いたように、ぼくは無着さんの学校を見に行きました。楽しくやっていましたね。夏の暑いときだから上半身裸でね。そういう時代だったんだね。戦後教育の締め付けが始まるのは昭和三十三年です。学習指導要領から「試案」の言葉が消えたころですね。
- （山田）先ほどの、火葬のために遺体を左廻りで運んだという話ですが、『古事記』でイザナキ（男）が左に廻り、イザナミ（女）が右に廻ったらヒルコ――蛭子：イザナキとイザナミの最初の子。三歳になっても脚が立たず、流し捨てられたと伝える。中世以後これを恵比須として尊崇される――が生まれ、互いに逆に廻ったらアマテラスが生まれたという話があります。また縄文土器の縄目文様にも右回り左廻りがありますが、葬送時の左廻りの習俗との関係は考察されたことはございますか。
- （庄司）まだはっきりしないですが、そういうの残っていますね。ガンバコ（棺）を背負ったらさっさと行けばいいのにね。
- （石毛）私は一九六〇年代の中頃にそのような葬送儀礼を経験しています。まだやっていました。三回半だったかな。あと深沢七郎の小説を読んでいると、東北では、間引きしたときはその合図として屏風を逆さにするそうです。そういうことはありますか。
- （庄司）あったんだろうけれども忘れていますね。
- （山田）禅宗の葬送でもお坊さんが棺桶と一緒に廻りますね。
- （石毛）真言宗でもやります。「先導」がいて葬送を仕切りますね。うちの田舎はまだ若衆宿があったんですから（笑）。
- （山田）仏壇ですが、日本人には当たり前ですが日本独自のものと聞いたことがあるんですが・・・。
- （庄司）いや、調べてないね。
- （石毛）庄司先生が神道のほうに行かないで、仏教に進んだのは何かなと思うんですけど。
- （庄司）柳田さんに何かの折りに、「私のところは仏教でも曹洞宗です」と言ったこ

とがあって、そしたら「そうか、だったらあんたの田舎はだいぶ習俗が残っているよ」、こう言ったね。南無阿弥陀仏の浄土真宗の地方に行くとほとんど習俗がなくなるからと教えてくれたことがあります。そのくらい浄土真宗は大衆まで浸透するほど徹底的だね。「妙好人」という篤信の信者が出てくるでしょ、禅宗では「居士」なんて在家の禅の修行者がいるけど、なんかふんぞり返っているようで、大衆までは届いていないようだね。

- （武田）先生のお兄さんも余所の曹洞宗のお寺を継がれたそうですが、先生はたしか自分の家のお寺は継がないと宣言されたんですよね。
- （庄司）そう、そう決めたのに親父が、「坊さんになれ」というもんだから、頭を剃られてね、とにかく一日で坊さんになったんです。一日で得度（出家）したわけ。豊田小学校時代でした。その得度の儀式には、五つくらい禅問答を暗記してね、問われたら答える用意をしたのです。
- （石毛）先生の話からは、戦後のモダニズムの影響というのを感じられないのですが、どうでしょうか。
- （庄司）そうだね。ぼくがモダニズムに接近するのは昭和三十八年ころの仮説実験授業に取り組んだあたりからですな。あれで科学を知ったんです。科学を通して近代を意識できたんですね。戦後まもなくは、「近代化」は大騒ぎするテーマだったんです。例えば農地解放がありますね。ぼくの母親は五つのとき亡くなったのだけれど、二度目の母親はすごく実力があってね、ぼくをこういうふうに育ててくれたわけ。どのくらいぶん殴られたか・・・。でもね当時農地解放になったとき、この母親が一人で踏ん張ってね、小作人との交渉のために何回も足を運んでね、酒を飲ませ、頭を下げていました。農地をだいぶ没収されたんだけど、なんとか四反だけは確保したんです。すごい働きだったね。だけど、そのときぼくは正義感を持っていたから、母親のがんばりにだいぶ反感をもったね。

　でも表立った反抗ができないものだから、文章に走ったんだろうね。師範学校に卒業論文はないし、教育実習は終っても報告を書かなくても良かったから、自分で無理にでも報告書などを拵えたんです。当時宗教教育が研究テーマだったから、上京したときは嬉しかったね。総持寺（横浜市鶴見区にある曹洞宗の大本山）であろうと、真理運動を創唱した友松圓諦さんの神田寺（東京都千代田区の浄土系の寺）であろうと、どこにでも行って宗教と宗教教育の話を訊けると思ったからね。そしたら、戦後モダニズムの影響だろうか、鶴見の総持寺でさえもかなり自由だったんです。訪ねて、貫首(かんじゅ)様にお会いしたいと言ったら、「おいで」と言ってくれたんですよ。そしたら貫首さま（渡辺玄宗という新潟県出身の方でした)、大きな座布団に座ってね。ぼくはその時「なんか書いてください」とお願いしたら、ちゃんと書いてくれました。神田寺の友松先生は、ぼくみたいなのにはね、全然知らんふりでした。鎌倉の円覚寺へ鈴木大拙にも会いに行ったんです。鈴木大拙の本はほとんど読んで行ったのだけれど・・・、門前払いでした（笑)。

用意された資料

- **資料NO.1**：私の研究歴・その控（『仮説実験授業の論理構造　復刻版』より）Ｂ５サイズ七頁分
- **資料NO.2**：『昭和二十二、二十三年度我が育心の遍歴――（宗教教育研究輯）――』Ｂ５サイズ十二頁分、・はしがき、・目次、・『大法輪』に於ける「佛道の生活体験談」に対する一考察、・宗教研究上に於ける宗教教育の位置、・宗教教育を考察するに当って
- **資料NO.3**：『昭和二十九年度　日本人における外来思想の受容的基盤の研究――その覚書』、・日本民族の霊的観念について＝日本人における外来思想の受容的基盤の研究

――（柳田国男著『先祖の話』）――29.7.28、『テーマのある読書点描（IX）29.8.13 民間仏教史研究への志向――（堀一郎著『我が国民民間信仰史の研究』を読む）――』Ｂ５サイズ八頁分

- 資料NO.4：『宗教教育実践への前提――（調査事項を中心として）――』Ｂ５サイズ八頁分、「たゆざる歩み」、・目次、・宗教教育調査資料、・調査事項整理、